

電気の精 (la Fée Électricité)



ラウル・デュフィ作『電気の精』は、パリ近代美術館の中心部に展示されている**10m×60mの巨大な壁画**で、1937年にパリで開催された万国博覧会のために描かれたものです。電気の概念から最新の技術的成果まで、その歴史を明らかにしており、電気にまつわる哲学者、科学者、技術者108名が登場しています。

皆様も是非、下記QRコードよりwebサイトをご訪問して頂き、絵画の中のエジソン、ファラデー、フランクリン、・・・を、見つけてみては如何でしょうか？

出典：一般社団法人電気学会 パリ市立近代美術館「電気の精」のご紹介
https://www.iee.jp/blog/la_fee_electricite/

登場人物や技術についての日本語紹介文の作成担当には、電気学会 電気技術史技術委員会の指名を受けた「電気の精研究チーム※」があたりました。

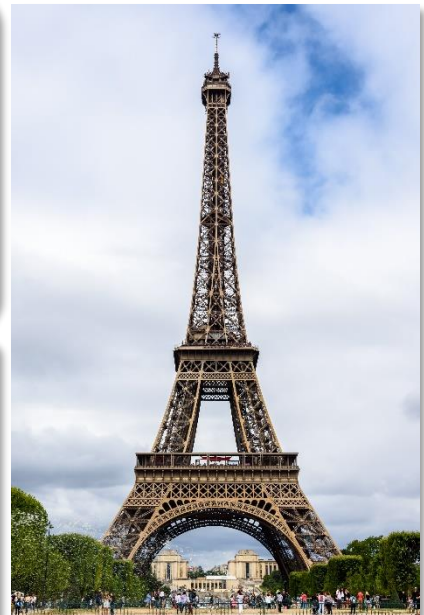
※メンバーは、

田中國昭氏（千葉大学）、	松本榮壽氏（電気学会 上級会員）
小浜清子氏（フランス語翻訳家）、	鈴木美幸氏（英語翻訳家）
鈴木浩氏（メタエンジニアリング研究所）	の5名です。

**パリ近代美術館
『電気の精』
日本語訳HP**



<https://fee.mam.paris.fr/visite-virtuelle/?lang=ja>



電気の精HPの操作方法の紹介



パリ近代美術館
『電気の精』 日本語訳HP

画面の操作方法



説明画面への操作手順



デュフィの『電気の精』へのおさそい①

出典：一般社団法人電気学会会誌142巻6号(2022年)

松本榮壽(電気学会上級会員)
鈴木 浩(メタエンジニアリング研究所)

皆さんがパリを訪れる際は、誰しもが「ルーブル美術館」や「ボンピドー・センター」を目指すでしょう。でも今日は「パリ近代美術館」(Musée d'art moderne de Paris)へおさそいしましょう。そこには、1937年のパリ万国博覧会に出品されたラウル・デュフィ(1877-1953)の高さ10m×幅60mの巨大な壁画「電気の歴史を描く傑作」が展示されています(図1)。パリには国立近代美術館もあるので注意しましょう。

『電気の精』の概要

この大型の壁画の作者デュフィの画風、壁画のテーマ・構成、当時の環境などについて説明しましょう。

1) デュフィの画風 デュフィは1877年北フランス・ノルマンディー生まれ、17世紀の画家クロード・ロランや印象派のモネの影響も受けますが、印象派的写実を捨て、フォービズム(野獣派)の強烈な色彩へと向かいます。デュフィは近代的・庶民的モチーフを好み、色彩の魔術師ともよばれ日常生活や街路・風景なども好んで描きました。

2) 壁画のテーマ この壁画は電気エネルギーを示す『電気の精』がテーマです。電気の歴史と電気の発見を可能にした科学的偉大発明の歴史を語っています。

3) 注文主 「近代生活の芸術・技術をテーマとした万国博」の電気館のために、フランス電力会社(EdF)の前身のパリ配電会社の注文により制作されました。注文は、「電気の果たす第一の社会的役割」、すなわち、電気の発見がどのように人々の生活を改良したかを示すことでした。

4) 壁画の構成 大きくは中央・上部・下部の三部に分かれています。中央にオリンポスの神々が超近代的なヴィトリ・シュル・セーヌ発電所の上に君臨し、古代から現代へと移りゆく空間が作りだされています。壁画の下部に、デュフィは科学的発見・応用に貢献した108名の哲学者・科学者・技術者を配しています。右手には、古代ギリシャの三哲人(タレス、アリストテレス、アルキメデス)をはじめ、フランクリンの避雷針、キャヴェンディッシュの実験などを描写しています。

左手下部には、ファラデーに始まる物理学者や科学者などが並んでいて、次いでモルスの電信機やレントゲンの実験器具、さらにエジソンの電球へと時代は移っています。

上部右には、自然や風景など電気の発明以前の世界が展開しています。左半分は、電気の妖精が世界をめぐる、電気のおかげで人々の生活が豊かになり、われわれが消費社会に生きていることをデュフィは示しています。

5) 壁画の中心思想はルクレティウス

デュフィは、古代ローマの詩人・哲学者ルクレティウスが原子論や有為転変を語る『事物の本性について』から学んだと言われています。抑圧の時代に生きたルクレティウスはすべての人の手に届く幸福の手段を明らかにしたとされ、デュフィはこれに勇気づけられたのでしょう。

6) この時代の環境 この作品が誕生した1937年は、第二次大戦(1939-45)前夜の不安定な時代でしたが、『電気の精』のおかげで幸福に向かう人類の動きが描かれていると言えます。万国博覧会の入口にはドイツ館とソビエト館が巨大なパビリオンを競い、スペイン館にはピカソの「ゲルニカ」も出品され多彩な時代でした。

7) 万国博覧会の終了後 壁画は、しばらくパリ配電会社の倉庫に忘れられていましたが、第二次大戦後1964年にパリ近代美術館の常設展示となりました。また1/10の大きさのリトグラフ作成が企画され10枚一組で350セット制作され、わが国にも30セット位あると言われています。



図1 『電気の精』の展示の様子

デュフィの『電気の精』へのおさそい②

出典：一般社団法人電気学会会誌142巻6号(2022年)

巨大な修復作業

『電気の精』の再評価プロジェクトは、2020年7月から10月に行われ、絵の修復から始まりました。最初にドローンを使用して非常に正確な写真での記録が行われ、高さ10m×幅60mのこの作品を1000枚以上撮影しました。その後、12人の修復者が参加して、絵のほこりを取り除きながら250枚のパネルの色に光沢を復元しました。

この修復作業は、1954年にこの傑作を博物館に提供した歴史的プレーヤーであるフランス電力会社の支援を受けています。この作業の当初から、FIEEC（電気電子通信産業連盟）とそのシンクタンクであるロダンクラブは、『電気の精』に登場する科学者、技術者を幅広く紹介するために資金と人的資源を提供しました。この作品を広く知らしめ、登場者を生き生きとさせるという共通の目的を持って行われました。

デジタルメディアーションプロジェクト

近代美術館では、科学と芸術との融合というタイトルで再展示の企画が実施され、ロダンクラブプロジェクトと称されました。絵に登場する108人の紹介をデジタルメディアを用いて、英語・フランス語・日本語で行われることになったのです。その日本語担当を担ったのが、電気学会の電気技術史技術委員会の指名を受けた「電気の精研究チーム」です。

日本語紹介プロジェクト

この仕事のきっかけとなったのは、電気の精研究チームが我が国で毎年開催している「電気の精フォーラム」でのフランス側との情報交換でした。毎年行われているフォーラムでは、『電気の精』にかかわる講演を中心に講演、討議が行われています。フランス側からロダンプログラムの紹介があり、日本語での紹介記事作成が依頼されました。フランス語と英語の紹介文ができていたので、それをベースとして、日本人訪問者に理解しやすいような内容としました。特にフランス語版では、多少自国びいきの記述があったのを公平な視点で見直したりしながら約半年かけて日本語版を製作しました。

『電気の精』オープニングイベント

オープニングイベントは、2021年9月30日にパリ近代美術館で開催されました。タブレット上の拡張現実アニメーションを用いて、訪問者はこの傑作を芸術的だけでなく、技術的・科学的・社会的側面を通じて再発見できるようになっています。訪問者には、当面、フランス語と英語で3つのルートが無料で提供されていて、22人の科学者とその発明による科学的なルート、芸術的および歴史的なルート、家族向けのルートとなっています。同時に、『電気の精』のホームページでは、360°の探査ツールのおかげで、この作品のフレスコ画に登場する108人の哲学者・科学者・技術者についてさらに学べるように一般の人々を招待しています。その内容は以下のリンク先のパリ近代美術館のホームページで見ることができます。

《フランス語》

<https://fee.mam.paris.fr>

《日本語》

<https://fee.mam.paris.fr/visite-virtuelle/?lang=ja>

このサイトでは、フランス語、英語、日本語のページに誰でもアクセスでき、科学と技術進歩に捧げられたこの傑作に関するビデオ、ポッドキャスト、その他のリソースを提供しています。

パリ近代美術館をおたずねいただくか、WEBサイトへのご来場をお待しています。